「ロックからフラメンコへ」

インタビューを受ける大塚友美さん

フラメンコと出会ったのは、20 歳の頃。当時、ロックバンドをやっていて、自分たちで素材を見つけて、オリジナル曲を作っていました。その素材を見つける中でフラメンコに出会ったんです。「音楽を聞いただけではフラメンコのことは分からない」そう思い、実際に踊ってみました。それが意外と面白くて、そこからのめり込んでいったんです。

プロになるまでの数年間は、非常に密度の濃いものでした。まだ、会社勤めをしていた頃は、朝、練習をしてから会社に行き、昼休みは空き地やビルの屋上でよく練習をしていたものです。会社から家に帰ってからも、夜に公園などで練習。その後１年くらいフラメンコの本場スペインへも行って修行しました。

フラメンコはスペインの土から生まれるものなので、日本人であり日本で暮らしながらフラメンコを追求していくのは、大変でした。街へ出ればフラメンコがあるという環境ではない。何もないところでたった一人で何を生み出せばいいんだろうと悩んだこともあります。

でもそんな状況に、あらがいはしませんでした。落ち込むだけ落ち込んで、悩んで胃が痛くなっても、「今は我慢の時期」と腹を据えています。

自分の気持ち、体に正直にいようと思っています。

「フラメンコとは、胸の痛みです」

私が好きなのは、舞台の上のフラメンコではなく日常に密着したフラメンコです。フラメンコとは、ずばり“ 心の痛み、胸の痛み ”だと思っています。喜びや悲しみを踊り手が発信し、客席の人がそれを受け取って、お互い心を震わせ、同じ気持ち、同じ時間を共有するフラメンコをやっていきたい。

芸術家の多くは、いわば個室にこもって自分と対峙し、作品を産み落とします。フラメンコを歌ったり踊ったりする人は、子供も大人も皆が集まる大部屋の中に身を置き、そこでフラメンコが生まれ、育まれるのです。公演では、“ 個人の世界を表現するのも素敵だけれど、大勢が集まる中で生まれるフラメンコも、温かくて感動的だよ ”というメッセージを届けたいと思っています。

独創性の強い作品こそ、それは皆に開かれたものでなくてはなりません。独りよがりなものになっていないかどうか、常に自問しています。何かを追求すると、自分とその対象だけになり、周りが見えなくなります。それはすごく損なことだと思います。大切な人をたくさん作って、その人を大切にする。人を幸せにすると自分が幸せになる。それはとても大きな喜びです。

公演前には、家事や仕事は放棄して、自分の踊りと公演のことに集中したいという気持ちはありますが、なぜかそれではいい結果が出ないのです。それよりも、掃除をしたり、料理を作っていたり、普通に生活しているほうが、いい結果になります。家族が気持ちよく生活できることが回り回って、いい結果を生んでいるんですね。

自分たちが楽しみ、見ている人も一緒に楽しむことが大事だと思います。

「浜松まつりとフラメンコには共通のスピリットがある」

浜松まつりとフラメンコはよく似ているんですよ。スペインには、新郎新婦を騎馬に乗せて大勢の人が囲み、歌い踊って祝福する結婚式があります。子供を祝う行事でも、やはり大勢の人が集まって、子供を丸く囲んで祝います。それは、浜松まつりで初子のお祝いのときなどに行う練りの雰囲気と同じです。

浜松まつりの掛け声である「やいしょ、よいしょ」も、フラメンコの掛け声である「オーレ」も、どちらもその人を祝福して囃したててあげる言葉ですね。日本語とスペイン語の違いはあるけれど、祝福しようというスピリットはまったく同じ。

ですから、浜松の人はフラメンコのことをきっとよく分かってくれると思います。

浜松の女性はものをはっきり言うことが多いと思います。それは、時に誤解されやすいのではないでしょうか。私は、そこに嘘はなく素直で取りつくろうことがないから好きですけどね。

それは浜松の男性も同じですね。祭りなんかに出ると、取りつくろわないし、素直な子供のような感じがして、“かわいい”って思っちゃいます。公演で東京や地方に行きますが、こんなにお茶目な男性はどこにも見当たらないですね。

「フラメンコにかける思いが枯れることはない」

私は、夕焼けを見るのが日課のようなものです。夕焼けの美しく壮大な景色を目の当たりにすると、「人間にできることは本当にたいしたことがないよ」と思ってしまいます。私みたいなちっぽけな人間がやるからこそ、精一杯できる限り手抜きをせず命がけで舞台を作ろうと思えるのです。

自然は作りものではありません。人工的なものはどこかに嘘があると思います。ですから、効果を狙った踊りはたいしたことはなく、心の底から出てきた踊りが本物だと思っています。

人間ひとりひとりは、この広い宇宙にたったひとつのもの。それはとても尊いと思います。すべてを肯定的に捉え、自分を大事にしてあげると、人のまねごとではない、世の中でたったひとつの踊りが踊れるはずです。それによって、誰かが感動してくれたり、元気を出してくれれば、踊り手冥利に尽きますね。

座右の名は、「鳥が鳴くように踊る」です。鳥は自分が持っている声で、一生懸命ただひたすら鳴いています。私も、そういう風に踊りたい。

一つのことを追求することは、本物を知りたいという探求心を忘れないこと。それが枯れたら終わりです。

ただ、私のフラメンコに対する思いは枯れることはないと思います。